

エンゲージメント

各章 あらすじ

Kumari

A close-up photograph of a human hand, palm up, holding a glowing, golden orb of light. The orb is surrounded by numerous small, sparkling particles, creating a magical and ethereal atmosphere. The background is a soft, out-of-focus blue and white light, suggesting a bright, open sky or a celestial setting.

〈第1章 あらすじ〉

ローザ・ドリーはヒーラーとしてマウイ島に暮らしている。

身寄りのない彼女は、六三歳の誕生日を迎えて間もなく、自分の体が癌で蝕まれていることを知った。余命は半年ほど。

ローザの父親は日本人であるが、ローザが生まれる前に両親は離れ離れになっており、彼女の母親は四〇代の若さでこの世を去った。また十八年前にローザの元に届いた一通の手紙によって、日本人である父親もすでに他界していることを知った。その手紙には故人の名前である「佐伯創一郎」の下に、「故人親族より」とだけ書かれていた。

余命を宣告された日の午後、ローザは浅い眠りの中で、
『最後の仕事を終えたら肉体から離れ、長い休息を取りなさい。近々、後継者をあなたの元に送ろう。残された時間は自分の為に使いなさい。今のうちに逢いたい人に会っておくがよい』
そのような言葉を聞いた。

最後の仕事…今のうちに逢いたい人…

夜明け前の砂浜で彼女は、それらのことを考えていた。

すると遠くのベンチでうずくまるように座っているブロンズヘアの男の姿が目映った。そしてまた、この数日、頻りにローザの夢の中に現れる男性がおり、ローザはその男が誰であるのかわからぬままに、何度も奇妙な夢を見続けているのだった。

〈第2章 あらすじ〉

ローザの生い立ちは決して平穏なものではなかった。

海外医療ボランティアとして戦地に出向いていた医師、佐伯創一郎と、その戦地で孤児達の救済にあたっていたアメリカ人女性のテレザ・ドリーは自然の流れに従い、愛し合った。そのふたりのあいだに出来た子供がローザである。

だが、二つの国の血を引くローザの命が宿った頃、二人の母国は、敵対国、とお互いを呼び合い殺戮の争いが始まり、両親は結ばれぬまま離れ離れになった。

ローザはアメリカで生まれたが、敵対国の血を引く彼女に待ち受けていたものは、壮絶な虐めだった。母子ともに世間の冷たい仕打ちに耐えてきたが、いつしかローザは家から出ることもできなくなっていた。

その後、母親とローザは逃げるようにマウイ島にやって来たのだった。

マウイ島での生活も決して楽なものではなかったが、それでも穏やかに月日は流れていった。今まで口をつぐんできた佐伯創一郎のことも、母親はローザによく話し聞かせてくれるようになっていた。

月日は流れ、ローザの二十二歳の誕生日を目前に控えた頃、母親は佐伯創一郎との再会を願い、ローザと日本を訪れる計画を立てていた。

しかし母親は、ローザの二十二歳の誕生日を目前に他界してしまったのである。

当時、天涯孤独の身となったローザは精神的に不安定な日々を送っていたが、ある朝、彼女は海辺で尊い声を聞いた。

その日からローザはその声と共に生き、長い年月をひとりマウイ島で暮らしているのだった。

〈第3章 あらすじ〉

明け方の海辺で一人の男性の姿がローザの目に止まった。

彼は数日前に見かけたブロンズヘアの男で、ローザが歩み寄っても気付くことなくベンチに座り、俯いていた。

ローザは持参していたハイビスカスのハーブティーを、紙コップに注いで男に差し出した。

すると男は誰かと勘違いをしたのか、

「ミ・キ・コ？」

そう言って、驚きを隠せない表情で顔を上げた。

男はフランス人で、ミシェル・フローレンと名をつた。その後、彼は自分の職業を「画家でした」と過去形でローザに告げたのである。

ミシェルは ^{しんざき みきこ}新崎美希子という女性とマウイ島で暮らしている。だが、今の彼の生活はアルコールに浸り、指先はすでにアルコール依存で震えが見られ、絵筆を持つこともなくなっていた。

この数日彼は、ローザのことを待っているかのように、夜明け前の砂浜のベンチに座っていた。そんな彼にローザは、誰かの見えぬ力にでも操られているかのようにこう告げたのである。

「ミシェル、目の前のマウイの太陽を、あの光を、出来るだけ多くの人に見せてあげなさい。それが、あなたに託された神の仕事です」

しかし、アルコールに侵されたミシエルの手は、絵筆を持っていても震えが止むことはなかった。自分のアトリエで苛立ちがピークに達した彼は、空の酒瓶を、ドアのほうをめぐらしておもいきり振りかざした。だが、その時だった、ふいに美希子の顔が浮かんだ。その映像とガラス瓶の割れる音を聞いた彼は、束の間、意識を失くした。

意識が戻ると目の前には、顔から大量の血を流した美希子が座り込んでいた。

その頃、物音ひとつしない真夜中の刻に、ミシエルの家で怪我人が出ていることなどローザは夢にも思わずに、これまでのミシエルの境遇について考えていた。

〈第4章 あらすじ〉

「ミキコの顔を傷付けてしまった」

夜明け前の海辺でミシェルからその話を聞かされたローザは、「^{かのじょ}美希子が目を覚ましたら、わたくしの家へ連れていらっしやい。手当をして差し上げましょう」と言った。

ミシエルの家のウッドデッキで美希子らしき黒髪の女性を見かけた時、ローザはなぜか彼女のことを気にかけていたが、まさかこのような形でその彼女の話題が出るとは夢にも思っていなかった。

その日の午後、美希子は顔に負った傷の手当てのためにミシェルに連れられてローザの家へやってきた。美希子と対面したローザは、彼女を見て、日いずる国の女神様を連想した。そして、「やっとあなたに巡り会えた」という想いが湧きあがった。

美希子はローザの家のリビングに足を踏み入れると、棚の上に並べられている、乾燥ハーブが入れられた瓶を懐かしい物でも見るようにしばらく眺めていた。彼女はハーブの知識などないはずであるが、時に、ハーブや精油等を見るときで専門家みたいなことを言うことがあった。ミシェルはそんな美希子のことを不思議に思うこともあったが、しかし当人である美希子のほうもそんな自分のことをよくわかっておらず、「ただ何となくそう思っただけ」と答えることが多かった。

その時はまだ誰もそんな美希子のハーブの知識について深く考えることはなかった。

ローザが美希子の顔の傷の手当てをはじめると、美希子は「この辺り」と言い、傷口のすぐ真下あたりを指で触れた。ローザはその場所をよく目を凝らして見た。すると今回の傷とは別に傷口のすぐ下に、うっすらとした白い線が浮き出していた。

その傷は、美希子が子供の頃、祖母が飼っていた猫のうしろ脚で傷付けられたものだった。猫を抱きあげた時にうしろ足で蹴られたのだが、その時も、そして今回も、顔の怪我のことよりも瞳が無事であったことを喜んだのだった。

ローザはそんな美希子の話を聞きながら傷の手当てをはじめていた。自分で作ったハーブ水をガーゼに含ませ、美希子の傷口を消毒した。そのあとに軟膏を傷口に塗りつけた。軟膏からはラベンダーのような木の香りのような植物を感じさせる香りが漂っていた。軟膏もローザの手作りしたもので色々なハーブのエキスがブレンドされており、そのハーブの香りは美希子の体の中に心地よく染み込んでいった。

ローザは美希子の傷口に新しいガーゼを当てると、ガーゼの上にそっと自分の手を置いた。

しばらくそうやっていると、美希子の体はローザの手の温もりに包まれた。

美希子は軽い睡魔に襲われ、いつしか時間の感覚さえもわからなくなっていた。